

小学校サッカー授業におけるキープ技能指導の 必要性に関する研究

元 塚 敏 彦

要旨：本研究は、サッカー授業において、ボール操作技能の一つであるキープ技能に関する指導が、同じボール操作技能であるシュートやパスの指導に比較して行われていないという現状から、キープ技能指導の必要性を検討した。

その結果、以下のキープ技能指導の必要性が示唆された。

- 1 サッカー授業のゲーム学習における問題点を解決するためには、キープ技能を身に付ける必要のあることから、キープ技能に関する指導の必要性が示唆された。
- 2 ボールを掴めないというボール操作方法上の難しさから、キープ技能に関する指導の必要性が示唆された。
- 3 サッカーの本質的楽しさを体験するためには、キープ技能を身に付ける必要のあることから、キープ技能に関する指導の必要性が示唆された。
- 4 サッカー授業で「知識」や「表現力」を身に付けるためには、キープ技能を身に付ける必要のあることから、キープ技能指導の必要性が示唆された。

キーワード：サッカー ボール操作 キープ技能 戦術選択

I はじめに

1 ゴール型の技能構成と内容

平成20年改訂の現行小学校学習指導要領（以後、「現要領」と略す）から中学年のゲーム領域と高学年のボール運動領域の内容が表1に示す攻防の特徴から「ゴール型」、「ネット型」、「ベースボール型」の三つの型に分類された¹⁾。そし

て、これらの領域における技能は、表2に示すように攻防のためにボールを制御する技能である「ボール操作」及びボール操作に至るための動きや守備にかかわる動きに関する「ボールを持たないときの動き」で構成され、各型別に技能内容が示された²⁾。このボール運動系の分類や技能内容の構成は、平成29年改訂の新学習指導要領（以後、「改訂要領」と略す）やそれに合わせて作成された小学校学習指導要領解説体育編（以後、「新小学校解説」と略す）にも継続、踏襲されている³⁾。

表2から本研究の対象種目であるサッカーのボール操作は、ゴール型のシュート、パス、キープで、ボールをもたないときの動きは、空間・ボールの落下点・目標（区域）に走り込む、味方をサポートする、相手のプレーヤーをマークするなどであることが確認できる。各ボール操作技能は、表3のように説明され⁴⁾、本研究の対象技能としたキープは、ボールを相手に奪われないように保持する技能であることが確認できる

表1 ボール運動の分類型と特徴

型	攻防の特徴
ゴール型	コート内で攻守が入り交じり、手や足などを使って攻防を組み立て、一定時間内に得点を競い合う
ネット型	ネットで区切られたコートの中で攻防を組み立て、一定の得点に早く達することを競い合う
ベースボール型	攻守を規則的に交代し合い、一定の回数内で得点を競い合う

表2 ボール運動領域の技能構成と内容⁵⁾

技能構成	技能内容
ボール操作	(ゴール型) シュート・パス・キープ, (ネット型) サービス・パス・返球, (ベースボール型) 打球・捕球・送球 など
ボールを持たないときの動き	空間・ボールの落下点・目標（区域や塁など）に走り込む、味方をサポートする、相手のプレーヤーをマークする など

表3 中学校学習指導要領解説保健体育編に示されるシュート、パス、キープ技能の説明

技能	説明
シュート	味方から受けたボールを、得点をねらって相手ゴールに放つこと
パス	味方にボールをつなぐこと
キープ	ボールを相手に奪われないように保持すること

2 現小学校学習指導要領解説体育編の示すサッカーに関連する指導内容

表4はキープ技能に関する指導がどのように行われているのかを確かめるために、現小学校学習指導要領解説体育編（以後、「現小学校解説」と略す）のサッカー授業に関連する指導内容を抽出したものである⁶⁾。表4に示される指導内容やそのための学習活動となる例示から、シュートやパスに繋がるボールを蹴ることを学習課題にしたものが多く、キープ技能に繋がる指導内容や活動を示

表4 小学校1,2年生のゲーム領域(ボールゲーム)や3,4年生のゲーム領域(ゴール型ゲーム),5,6年生のボール運動(ゴール型)におけるサッカー技能に関する指導内容

学年, 領域等	サッカー技能に関する指導内容
1, 2年生のゲーム領域(ボールゲーム)	指導内容 ア ボールゲームでは、簡単なボール操作やボールを持たないときの動きによつて的に当てるゲームや攻めと守りのあるゲームをする 例示 的当て遊びや蹴り合い、的当てゲーム、シュートゲーム
3, 4年生のゲーム領域(ゴール型ゲーム)	指導内容 ア ゴール型ゲームでは、基本的なボール操作やボールを持たないときの動きによつて、易しいゲームをすること 例示 ラインサッカー、ミニサッカーなどを基にした易しいゲーム(足を使ったゴール型ゲーム)
5, 6年生のボール運動領域(ゴール型)	指導内容 ア ゴール型では、簡易化されたゲームで、ボール操作やボールを受けるための動きによつて、攻防をすること 例示 サッカー

していないことがわかる。このようなキープ技能に関する記述内容から、現小学校解説を参考に行われているサッカー授業では、キープ技能に関する指導が十分に行われていないと考えられる。

3 学習指導要領などにおけるサッカーの個人技能に関する記述

表4に示したように現小学校解説にはキープ技能に繋がる指導内容や活動が示されていないことから、キープ技能に関する指導をこれまでの学習指導要領や、それに関連して発行される指導書や解説の個人技能に関する記述を巻末資料1, 2にまとめた。

(1) 小学校学習指導要領などにおけるサッカーの個人技能に関する記述

資料1は小学校の学校体育指導要綱、小学校学習指導要領とそれに準じて発行される指導書、解説書(以後、これらを「指導資料」と略す)に示されるサッカーの個人技能に関する記述内容である。資料1の内容から、従来の要領や指導資料では、低・中学年でキックとストッピング、高学年で正規サッカーのためのキック、ストッピングに加えてドリブルやシュート、ディフェンスなどを学習の中心的課題としているが、キープ技能を個人技能として示してこなかったことがわかる。

このようにこれまでの学習指導要領などには、キープ技能に関する記述のないことから、これらの資料をもとに行われてきた小学校のサッカー授業では、キープ技能に関する指導が十分に行われてこなかったと考えられる。

(2) 高等学校、中学校の学習指導要領などにおけるサッカーの個人技能に関する記述

資料2-1は高等学校学習指導要領解説(保健体育編)、資料2-2は中学校学習指導要領指導書、解説(保健体育編)におけるサッカーの指導内容である。資料2-1の昭和45年作成高等学校学習指導要領解説(p99)にはドリブルが、資料2-2の昭和53年改訂中学校学習指導要領指導書(p59)には、トラッピング、ドリブルに1対1のボールキープやボールを支配下に置く、相手を抜き去る、ボー

ルを運ぶなどキープ技能に関連する技能が示されていたが、他の資料にはキープ技能を個人技能として示されていなかった。このようにキープ技能が要領や解説、指導書などに記述されてこなかったことから、高等学校、中学校のサッカー授業においてもキープ技能に関する指導が十分行われてこなかったと考えられる。

4 サッカーの指導に関する先攻研究や実践報告におけるキープ技能に関する指導

現小学校解説の示すサッカー授業に関連する指導内容や巻末資料1、2にキープ技能に関する記述がなかったことから、キープ技能の指導を先行研究や授業実践に求めてみた。

Ciniiでは、「サッカー」「キープ」「小学校」「体育授業」「ボール運動」「ボールキープ」等の単語やその組み合わせをキーワードに検索したが、キープ技能の指導に関する先行研究を求めることができなかった。

次に、「体育科教育 (1(1)~65(8)) (大修館書店)」のタイトルやサブタイトルに「サッカー」や「ボール蹴り」の含まれる論述や実践報告にキープ技能の記述を求めてみた。その結果、タイトルに「サッカー」や「ボール蹴り」の含まれる論述が60本、実践報告が46本、計106本あった。

60本の論述では、キックやトラッピングなど個人技術に関する解説や指導法に関する記述が多く、キープ技能をテーマにした論述はなかった。また、キープ技能に関連する記述も見られなかった。

46本の実践報告ではキープ技能に関連するボール慣れ、ボールコントロール、ドリブル、ボールの奪い合い、1対1の攻防などを報告した実践が17本あった。それらの報告でキックのためのボール慣れや、ボールコントロールなどを授業の目標に設定した実践が8本、単元を通して帯状に準備運動の内容としてボール慣れやボールコントロールなどが計画されていた実践が9本あった。実践の多くは、キックのためのボール慣れや、ボールコントロールの指導で、キープ技能を単元目標や授業目標にした実践や、キープ技能の指導方法を課題にした実践は見られなかった。(17本の実践報告は巻末資料3に示した)

このように現小学校解説の示すサッカー授業に関連する指導内容、要領などにおけるサッカーの個人技能に関する記述、サッカーの指導に関する先攻研究や実践報告に、キープ技能指導に関する記述のないことから、これまでのサッカー授業では、キープ技能に関する指導が行われていない、また、行われていたとしても不十分であったと考えられる。

そこで、本研究では、サッカー授業においてボール操作技能の一つであるキープ技能に関する指導が、同じボール操作技能であるシュートやパスの指導に比較して行われていないことから、キープ技能を身に付けるための指導方法の工夫が必要であると考え、その基礎的研究としてキープ技能指導の必要性を検討することにした。

Ⅱ 研究目的

キープ技能指導の必要性を検討する。

Ⅲ 研究方法

ゲームやボール運動領域の技能目標がゲームを楽しむ、その技能を身に付けることであることから、本研究ではキープ技能に関する指導の必要性を以下に示す視点から検討することにした。

- 1 サッカー授業におけるゲーム学習の問題点からみたキープ技能指導の必要性
サッカー授業におけるゲーム学習の問題点を解決する方法とキープ技能の関係から、キープ技能指導の必要性を検討する。
- 2 サッカーにおけるボール操作方法の難しさからみたキープ技能指導の必要性
サッカーにおけるボールを掴めないというボール操作方法の難しさから、キープ技能指導の必要性を検討する。
- 3 サッカーの本質的楽しさからみたキープ技能指導の必要性
サッカーの本質的楽しさの体験とキープ技能の関係から、キープ技能指導の必要性を検討する。

- 4 新学習指導要領に示された「知識」, 「表現力」を身に付けるための指導からみたキープ技能指導の必要性
 「知識」や「表現力」を身に付ける学習活動とキープ技能の関係から, キープ技能指導の必要性を検討する.

Ⅳ 研究結果と考察

1 サッカー授業におけるゲーム学習の問題点からみたキープ技能指導の必要性について

(1) 易しいゲーム, 簡易化されたゲームのための工夫

現小学校解説は, 中学年のゲーム領域で運動を楽しく行い, その動きができるように, また, ゲームに取り組みやすくなる工夫の方向性を表5に示すように易しいゲームのための工夫として示している⁷⁾. そして, 高学年のボール運動領域においても, 運動の楽しさや喜びに触れ, その技能を身に付けやすくするように, また, 学習課題を追求しやすくなる工夫の方向性を表5に示す簡易化されたゲームのための工夫として示している⁸⁾.

このような易しいゲーム, 簡易化されたゲームのための工夫がおこなわれているサッカー授業では, 多くの児童がゲームを楽しみ, サッカーの技能を身に付けていることと推察できる.

表5 易しいゲームと簡易化されたゲームの工夫

	説 明
易しいゲーム	◎簡単なボール操作 ◎比較的少人数 ◎身体接触を避ける など 児童が取り組みやすいように工夫したゲーム
簡易化されたゲーム	◎プレイヤーの数 ◎コート of 広さ (奥行きや横幅) ◎プレー上の制限 (緩和) ◎ボールその他の運動用具や設備 など ゲームのルールや様式を修正し, 学習課題を追求しやすいうに工夫したゲーム

(2) サッカー授業におけるゲーム学習の現状に関する指摘

このように現小学校解説によって技能構成やその内容、ゲームの工夫の仕方が示されたにも関わらず、サッカー授業、特にゲーム学習の現状に対して表6に示すような指摘がある。

易しいゲームや簡易化されたゲームのための工夫は、ボール操作技能の個人差が大きいことや、それらを身に付けるためには多くの時間が必要であることから、児童の個人技能不足を補完するための工夫であると考えられる。

しかし、児童がボール操作技能不足を補完する工夫のされたゲームに楽しく参加することによって、ボール操作技能を身に付けることができるとは思えない。表6のように指摘されるゲームの様相は、ボールをシュートするのか、パスするのか、キープするのかといった個人戦術やチーム戦術の選択に関係なく、偶然自分のところにきたボールを前方に蹴るだけ、そして、そのボールを追いかけているだけになっていると推察できる。

表6 サッカー授業におけるゲーム学習の現状に関する指摘^{9,10)}

- ①サッカーではボール操作の困難性から、戦術的課題の面白さから絶縁したゲームが展開されている。無意図的で偶然のキックが頻発するだけであって、児童にとってオーセンティックな（本物の）ゲーム学習からほど遠いゲームになっている。
- ②高学年のサッカー授業だけで、すべての児童がサッカーの技能を身に付けたり、チームの特徴に応じた作戦を立てることができていない。

(3) サッカー授業におけるゲーム学習の現状に関する指摘とその原因

小学校のゲームがこのような様相になる原因を以下のように考えた。

ア キック中心のゲーム様相とキック中心の指導内容

児童は表4に示した低学年の的当て遊びやボールの蹴り合い、的当てゲーム、シュートゲーム、中学年のラインサッカーによってボールを蹴るという技能(以後、蹴る技能を「キック技能」と記す)を身に付けてきていると考えられる。

このようなキック中心の学習活動から、児童がサッカーの学習課題はキック

であると経験的に学習してしまい、キックだけのゲーム様相になっていると考えられる。

イ キック中心のゲーム様相とキープ技能不足

児童は、キック中心の学習活動によってシュートやパス技能を身に付けることができたが、キープ技能を身に付けることができなかったと推察できる。表6に示されるように戦術課題の面白さを体験するためには、シュート、パス、ドリブルなどの個人技能やセントリング攻撃などの集団技能を発揮する必要がある。このような個人技能や集団技能の発揮には、ゲームの流れや自分の周囲の状況から最適なプレーの選択、つまり個人戦術の選択が必要である。競技レベルの選手による個人戦術の選択は、瞬時にまたはボールを受ける前におこなわれることが多い。しかし、授業レベルではそのような選択は難しく、児童はボールを止める、周囲の状況を確認する、個人戦術やチーム戦術としてシュートするのか、パスするのかを選択することになる。このようなプレーの中で、児童は少なくともボールを止めてから個人技能を発揮するまでの間、相手選手にボールを奪われないよう保持するキープ技能の発揮を求められることになる。

サッカーのボール操作は、攻防入乱れ型のゲームの中で足によるボール操作であることから難しいといわれている。シュートやパス技能はキックすれば、自分からボールが離れ、守備者の圧力から解放されるが、キープ技能では、自分の周囲にボールを置いた状態でボールを奪いにくる守備者からボールを守る必要のあることから、サッカーのボール操作の中でも特に難しい技能であるといえる。

このように難しい技能であるにもかかわらず、児童がキープ技能を身に付けていないことが、個人戦術を選択する時間を持つことができず、無意図的で偶発的なキックが頻発するだけのゲームが展開され、戦術的課題の面白さから絶縁したゲーム様相の原因になっていると考えられる。

ウ キック中心のゲーム様相とゲームに参加している児童の気持ち

以上のようにキックだけのゲームになっているゲーム様相の原因は、児童が

キック技能中心の指導によってキープ技能の指導を受けていないことにあると考えた。

さらに、ここではゲームに参加している児童、特にサッカーの苦手な児童の気持ちから原因を考えてみた。

サッカーのボール操作であるシュート、パス、キープ技能の特徴を技能の発揮方法から比較してみると、シュートやパスはボールを自分から離す技能で、相手のいない場面で発揮される技能である。対して、キープ技能は相手がボールを奪うために自分のそばにいる場面で発揮され、ボールを細かく移動させてボールを保持する技能である。このような特徴の違いから、相手のいない場面でシュートやパスとしてボールを蹴ってしまえば、自分が相手にボールを直接的に奪われたことにはならない。しかし、キープ技能は、相手が自分のそばにいる場面で、自分のそばにボールを置き続けた状態でボールを守る必要のあることから、相手にボールを奪われた場合、責任は全て自分のものとなる。

そのためキック技能しか身に付けていない、また、キープ技能を身に付けていない多くの児童は、この責任を回避するために個人戦術の選択をすることなしに、まずボールを蹴ってしまっているのではないかと推察する。このキープ技能を身に付けていない児童によって選択される責任回避のためのキックが、指摘されるような蹴るだけのゲーム様相の原因になっていると考えられる。

(4) サッカー授業におけるゲーム学習の現状に関する指摘からみたキープ技能指導の必要性

以上から、本研究ではサッカー授業で展開されているゲームの現状に対する指摘を解決し、児童が戦術的課題の面白さに触れるゲーム展開や意図的なキックが頻発するゲーム、本物のゲーム学習を行うためには、個人戦術の選択を可能にするキープ技能指導が必要であると考えた。

また、低学年のキック技能を学習課題とする指導内容や学習活動に、キープ技能を学習課題とする指導内容や学習活動を加えること、また、キープ技能とキック技能の指導順序を見直し、キープ技能を先に指導するカリキュラム内容の変更が必要であると考えた。

2 サッカーにおけるボール操作方法の難しさからみたキープ技能指導の必要性について

ここでは、サッカーのボール操作方法の難しさから、キープ技能指導の必要性を検討した。

(1) サッカーのボール操作方法とサッカーの難しさ

サッカーの特徴は足でシュート、パス、キープ技能を行うことである。この足による操作がサッカーの難しさになっている。足によるボール操作の難しさは、足では日常的に細かな作業を行わないこと、また、足ではボールを掴めないことに起因すると考えられる。細かな作業を行わないことに起因する難しさは、時間をかければ解決でき、足によるボール操作も手によるボール操作と同じように可能になる。このことはサッカー選手のボール操作を見れば明らかである。

しかし、足ではボールを掴めないことに起因する難しさは、時間をかけても掴めるようにはならない。同じゴール型ゲームの手でボールを掴めるバスケットボールやハンドボールでは、図1のように両手で掴んだボールを守備者から離れた位置に移動させることは易しい。しかし、サッカーで図1と同じようにボールを移動させるためには、ボールを1から2へ移動させる動作、具体的には図2のように体を右に回転させ（捻り）ながら、自分の体の回りを左足の内側で、しかも左足から離さずに転がす必要がある。左足からボールが離れた場合、相手にボールを奪われる可能性が高くなる。さらにサッカーの場合、ボールをボール1の位置でキープしていても、ボールはグラウンドの上に転がっている状態にあり、守備者からも操作できる位置にあると考えられる。

以上より、サッカーの場合、キープ技能によってボールを保持している状態にあっても、ボール保持者、守備者、ボールの位置関係や距離に関係なく、常にボールの奪い合いが行われている状態にあると考えられる。

また、図2において先に示したようにボールを移動させるのではなく、守備者とボールの間に自分の体を移動させるスクリーニング技能¹⁾によってボールを守備者から守ることもできる。この場合においても足によるボール移動と同様にボールはグラウンド上にあることから、ボールは奪い合いの状態にあると考えられる。

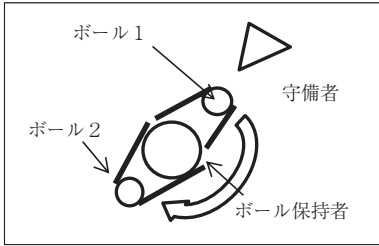


図1 手でボールを掴んだ移動

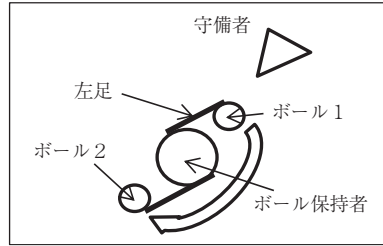


図2 足によるボールの移動

(2) ゲーム中におけるキープ技能の必要性

サッカーのボール操作技能であるシュート、パス、キープ技能を個人戦術の発揮から比較すると、シュートやパスは個人戦術として発揮されるボール操作で、キープは周囲の状況やゲームの流れから、自分の発揮すべき個人戦術を選択するための時間を確保するボール操作、つまり、個人戦術のための技能であると考えられる。また、ボールの持たないときの動き（以後、「サポートの動き」と略す）に要する時間を確保するための技能としても考えられる。

(3) ボール操作方法の難しさからみたキープ技能指導の必要性

キープ技能は、足によるボール操作のために難しいといわれているサッカーにおいても、このようにボールを掴めないことから、特に難しい技能であると考えられる。

しかし、個人戦術やチーム戦術を発揮するためにボール操作とサポートの動きを繋ぐ重要な技能である。このキープ技能を発揮することによって、戦術的課題の面白さに触れるゲームや意図的なキックが頻発するゲームが展開される。以上より本研究では、キープ技能を身に付けるためのキープ技能指導が必要であると考えた。

3 サッカーの本質的楽しさからみたキープ技能指導の必要性について

(1) 現小学校解説によるサッカーの楽しさ

サッカーの楽しさは、現小学校解説によると集団対集団の競い合い、仲間と力を合わせて競争することによるこびや楽しさを味わうことができる運動であると説明されている¹²⁾。このような競争の楽しさは、統一的なルールのもとでプレーヤーがチーム内の戦術的役割に応じた個人技能を発揮する近代的なサッカーの楽しさであると考え、現要領のボール運動領域には「ゴール型では、簡易化されたゲームで、ボール操作やボールを受けるための動きによって、攻防すること。」という技能目標が示されている¹³⁾。しかし、足によるボール操作が中心のサッカーにおいて、児童たちがボール操作であるシュート、パス、キープ技能、さらにボールを受けるための動きであるサポートの動きを身に付け、チームの戦術的役割に応じた個人技能を発揮することは難しい。

そのため、ここでは、近代的サッカーにみられる現象的なサッカーの楽しさではなく、サッカーの本質的な楽しさからキープ技能指導の必要性を検討することにした。

(2) サッカーの歴史からみたサッカーの楽しさ

浅見は、サッカーの本質的な楽しさについて、ボールの奪い合いやボールをめぐる闘争に引き出されるものであると述べている¹⁴⁾。浅見のいうボールの奪い合いから発生するサッカーの楽しさは、サッカーの歴史にも求めることができる。ラグビーも含めたサッカーの起源の一つに「民俗フットボール」がある¹⁵⁾。このフットボールには成文化されたルールがなく、ボールを投げたり、蹴ったり、相手を殴ることも許される原始的な荒々しいものであった。しかし、このフットボールは何百年も続き、現在においても続けられられている¹⁶⁾。その理由は「民俗フットボール」から現在のサッカーに至る過程においてルールや道具、技術、戦術などは変化したが、ボールを奪い合うという目的は「民俗フットボール」以来、変化ししていないことによるものであると考えられている¹⁷⁾。このようなサッカーの起源から、サッカーの本質的な楽しさは、ボールの奪い合いであると考えられる。

(3) 児童の感想文からみたサッカーの楽しさ

また、ボールを奪い合う楽しさは、表7の児童たちのサッカー授業に対する感想文にもみることができる¹⁸⁾。体育授業では団子状態のサッカーを評価しない傾向にあるが、1年生の児童たちの感想文から、蹴ることやシュートすることだけでなく、ボールの奪い合いに関わって、団子になってごちゃごちゃすることも楽しんでいる様子を読み取ることができる。

特に「かんとんにはいったらおもしろくない」「あらそうところがおもしろい」「みんなでせめていってごちゃごちゃあらそうと、とつてもたのしい」「かんとんに入ったらおもしろくない」「争うところがおもしろい」「横取りしてゴールに入れることがおもしろい」「じゃましあうことが楽しい」「横取りすることが楽しい」「ボールの取り合いで争うことが楽しい」などの感想は、運動が得意、サッカーが得意な児童の感想であると思われるが、これらの感想から現代サッカーの目指すパスを繋いでシュートし、できるだけ速く得点するという戦術的プレーによる楽しさではなく、「民俗フットボール」と同様に、そこにあるボールを奪い合うという単純な楽しさを長く味わっていたいという児童の気持ちを読み取ることができる。

表7 小学校1年生の感想文

かんとんにはいったらおもしろくない。
 あらそうところがおもしろい。
 みんなでせめていってごちゃごちゃあらそうと、とつてもたのしい。
 かんとんに入ったらおもしろくない。
 争うところがおもしろい。
 横取りしてゴールに入れることがおもしろい。
 ボールを蹴ることが楽しい。
 じゃましあうことが楽しい。
 シュートすることが楽しい。
 横取りすることが楽しい。
 走り回ることが楽しい。
 キーパーで守ることが楽しい。
 ボールの取り合いで争うことが楽しい。

浅見はサッカーの本質に触れてこそ、個人技能の練習が生きてくると述べている¹⁹⁾。このことから、児童たちはサッカーの本質的楽しさに触れることによって、その高まりである集団対集団、仲間と力を合わせた競争の楽しさを求めるようになると思う。

(4) サッカーの本質的楽しさからみたキープ技能指導の必要性

このように現小学校解説の示す集団対集団の競い合い、仲間と力を合わせて競争することによる喜びや楽しさを味わうためには、まず、児童たちがボールの奪い合いによるサッカーの本質的楽しさに触れる必要がある。

ボールの奪い合いによる攻防の楽しさに触れるためには、奪う技能とともに相手にボールを奪われないようキープ技能を身に付けている必要がある。

以上より本研究では、シュートやパスというボールを蹴る技能を身に付ける前に、奪い合いからボールを守る技能であるキープ技能に関する指導が必要であると考えた。

4 「知識」、「表現力」を身に付けるための指導からみたキープ技能指導の必要性について

(1) 「知識」、「表現力」について

改訂要領では、各領域の指導内容が現要領の「技能（運動）」「態度」「思考・判断」が「知識・技能（体づくりの運動遊び及び体づくりの運動領域は運動）」「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力、人間性等」に改訂された²⁰⁾。

表9は現小学校解説と新小学校解説に示されるボール運動領域の指導内容についてサッカーを例に比較したものである。

改訂要領の実施に向けて、新たな指導内容として加えられた「知識」、「表現力」を身に付けるための工夫が求められることになる。サッカーの授業においても同様に「知識」、「表現力」を身に付けるための工夫が行われることと思われる。

そこで、ここではキープ技能の必要性を新しく加えられた「知識」と「表現力」から検討することにした。

表9 サッカーを例にした現小学校解説と新小学校解説に示されるボール運動領域の指導内容の比較

	現指導内容	改定指導内容
現／技能 改／知識・技能（運動）	<p>(1) サッカーの楽しさや喜びに触れ、その技能を身に付けることができるようにする。</p> <p>ア サッカーでは、簡易化されたゲームで、ボール操作やボールを受けるための動きによって、攻防をすること。</p>	<p>(1) サッカーの楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、その技能を身に付け、簡易化されたゲームをすること。</p> <p>ア サッカーでは、ボール操作とボールを持たないときの動きによって、簡易化されたゲームをすること。</p>
現／態度 改／学びに向かう力、人間性等	<p>(2) サッカーに進んで取り組み、ルールを守り助け合って運動をしたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができるようにする。</p>	<p>(3) サッカーに積極的に取り組み、ルールを守り助け合って運動をしたり、勝敗を受け入れたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすること。</p>
現／思考・判断 改／思考力・判断力・表現力等	<p>(3) ルールを工夫したり、自分のチームの特徴に応じた作戦を立てたりできるようにする。</p> <p>ア サッカーの楽しいゲームの行い方を知り、プレーヤーの数、コート広さ、プレー上の制限、得点の仕方などのルールを選ぶこと。</p> <p>イ チームの特徴に応じた攻め方を知り、自分のチームの特徴に応じた作戦を立てること。</p>	<p>(2) ルールを工夫したり、自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりするとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。</p>

(2) 「知識」を身に付けるための指導からみたキープ技能指導の必要性について

「知識・技能」内容の「知識」内容は、技能の行ない方に関する理解で、現要領では「技能」内容として指導されてきた内容を「何を理解しているか、何ができるか」という視点から、技能の行ない方に関する理解が強調されたものである²¹⁾。この技能に関する「知識」を身に付けるためには、各領域の技能に関する

指導内容をより構造化、概念化して捉え、何を理解するのか、何をできるようにするのかを明確にした指導が必要である²²⁾。

サッカーを含むゴール型ゲームの技能内容はボール操作とサポートの動きで構成されている。このことから、サッカーの場合、この何を理解するのか、何をできるようにするのかの対象は、ボール操作とサポートの行い方であると考えられる。

サッカーにおけるボール操作の行い方に関する理解の対象は、ゲーム状況や自分の周囲の状況からいつ、どこに、何（シュート、パス、キープ）を発揮するのかという戦術の選択によって行われることから、ボール操作そのものであるシュート、パス、キープの行い方と戦術選択の行い方であると考えられる。また、サポートも、いつ、どこへ移動するかを選択によって行われることから、戦術選択に含まれるものとして考えることができる。

このような戦術選択の行い方に関する理解のためには、ゲーム中に戦術選択が行われる必要があり、戦術を選択する間、ボールを保持するキープ技能を身に付けている必要がある。キープ技能を身に付けていない児童たちのゲームは、表6に指摘されるように個人戦術やチーム戦術に関係なく、偶然、自分のところに来たボールを何も考えずに前方に蹴るだけ、そのボールを追いかけているだけの様相になってしまうと推察され、ゲームをとおして戦術選択の行い方を理解することができないと考えられる。

以上より本研究では、児童がゲーム学習において知識として戦術選択の行い方を理解するためには、戦術選択を行う間、ボールを保持する技能であるキープ技能を身に付ける必要があり、そのためにはキープ技能に関する指導が必要であると考えた。

(3) 「表現力」を身に付けるための指導からみたキープ技能指導の必要性について

新小学校解説は「表現力」を自己の課題について思考し判断したことを、言葉や文章及び動作などで表したり、仲間や教師などに理由を添えて伝えたりする力であると示している²³⁾。この「表現力」を身に付ける指導では、何を表現させるのか、児童の表現する対象を考える必要がある²⁴⁾。

この表現の対象を表9の指導内容に求めると、児童が思考し判断したことを、言葉や文章及び動作などで表したり、伝えたりする内容は、「思考力・判断力」の対象であるルールの工夫に関する内容、自分のチームの特徴に応じた作戦に関する内容と「知識」に関する内容であると考えられる。

「思考力」、「判断力」の内容は、現小学校解説に示される思考・判断と同じ内容であり、「知識」内容は新しく指導内容に加えられたものであることから、「表現力」を高めるためには「知識」内容を表現の対象にした授業の工夫が必要であると考えられる。

表現の対象となる技能の行い方に関する理解の内容について、先にボール操作そのものであるシュート、パス、キープの行い方に関する理解と戦術選択の行い方に関する理解であると考えた。

ボール操作そのものを対象に「表現力」を身に付けるためには、「親指を地面に付けるように伸ばしたら、足の甲で上手くボールをけることができた」などのようなキックの行い方に関する理解を表現し合う学習活動が必要である。

また、戦術選択を対象に「表現力」を身に付けるためには、「先のゲームでは慎重になりすぎた。もっとシュートした方がよかった」、「パスよりもドリブルで攻めた方がうまくいく」などのような戦術選択の行い方を表現し合う学習活動が必要である。

ボール操作そのものの行い方の理解は、キックを中心とした学習活動によっても可能であるが、戦術選択の行い方を理解するためには、ボールを蹴っているだけでなく、個人戦術や集団戦術を選択し、その選択について自分の意見や考えを表現し、交換する学習活動が必要である。

以上より本研究では、このような学習活動によって「表現力」を身に付けるためには、戦術選択を行う間、ボールを保持する技能であるキープ技能が必要であることから、キープ技能に関する指導が必要であると考えた。

V ま と め

本研究は、サッカーのボール操作であるシュート、パス、キープ技能の中で、キープ技能の指導がシュートやパスの指導に比べて行われていない現状にある

ことから、キープ技能指導の必要性を以下の視点から検討し、その結果、キープ技能指導の必要性を示唆することができた。

- 1 サッカー授業の現状に対する指摘
 - 2 サッカーにおけるボール操作方法の難しさ
 - 3 サッカーの本質的楽しさ
 - 4 新学習指導要領に示された「知識」、「表現力」を身に付けるための指導
-
- 1 サッカー授業におけるゲーム学習の問題点からみたキープ技能指導の必要性
サッカー授業のゲーム学習における問題点とキープ技能の関係を検討した。その結果、問題点を解決するためにはキープ技能を身に付ける必要のあることから、キープ技能に関する指導の必要性が示唆された。
 - 2 サッカーにおけるボール操作方法からみたキープ技能指導の必要性
サッカーにおけるボールを掴めないというボール操作方法の難しさとキープ技能の関係を検討した。その結果、キープ技能はサッカーの他の技能より難しい技能であることから、キープ技能に関する指導の必要性が示唆された。
 - 3 サッカーの本質的楽しさからみたキープ技能指導の必要性
サッカーの本質的楽しさとキープ技能の関係を検討した。その結果、キープ技能はサッカーの本質的楽しさを体験するために身に付ける必要のある技能であることから、キープ技能に関する指導の必要性が示唆された。
 - 4 新学習指導要領に示された「知識」、「表現力」を身に付けるための指導からみたキープ技能指導の必要性
「知識」や「表現力」を身に付ける指導とキープ技能の関係を検討した。その結果、キープ技能は「知識」や「表現力」を身に付けるために必要な技能であることから、キープ技能に関する指導の必要性が示唆された。

以上のキープ技能指導の必要性から、小学校のサッカー授業、特に低学年のボール蹴り遊びの指導においては、ボールを蹴る指導だけでなく、蹴ると同時に止める、止めたらボールを保持するという指導が行われるべきであると考えられる。

キープ技能の指導によって、ボールを保持するキープ技能を身に付けた児童は、サッカーの本質であるボールの奪い合いを楽しみ、その高まりである集団対集団、仲間と力を合わせた競争の楽しさを求めて、戦術的課題の面白さに触れるゲームや、意図的なキックの頻発するゲームを展開すると考える。

VI 今後の課題

本研究はキープ技能指導の必要性を経験的、文献的に検討するだけに終わった。児童がサッカーの楽しさを体験し、その技能を身に付け、戦術的課題の楽しさに触れるゲームや意図的なキックの頻発するゲームを展開する授業の工夫、改善のためには、キープ指導を単元の指導目標にした計画を作成し、その成果を実践結果から確かめる必要がある。

謝 辞

本研究では研究資料として雑誌「体育科教育」の創刊号である1953年9月から2017年6月号までに掲載されるサッカーに関わる論述や実践報告を調査した。その際、論述や実践報告の整理を快く手伝ってくれた皇學館大学教育学科4回生大山寛貴君に心よりお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 小学校学習指導要領解説体育編 東洋館出版社 平成20年 p18
- 2) 同上書1 同所
- 3) 文部科学省 小学校学習指導要領解説体育編 各領域の内容
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387017_10_1.pdf 2017/8/23 掲出 p32
- 4) 文部科学省 中学校学習指導要領解説保健体育編 東山書房 平成20年 p84
- 5) 前掲書1 同所
- 6) 前掲書1 p32-34, 51-53, 72-75

- 7) 前掲書1 p51
- 8) 前掲書1 p73
- 9) 岩田靖 5年生もっと楽しいボール運動②「センタリング・サッカー」岩田靖著 体育の教材を創る 大修館書店(2012) p141-142
- 10) 吉永武史 学習の系統性からボールゲームの教材づくりを考える 楽しい体育の授業29(10) 明治図書(2016) p1
- 11) DO SPORTS SERIES (1988) p46 一橋出版
- 12) 前掲書1 p17
- 13) 前掲書1 p72-73
- 14) 浅見俊雄 サッカーの技術構造とスキルテスト 体育科教育18(2) 大修館書店(1970) p40-43
- 15) 吉田文久 フットボールの原点 創文企画(2014)
- 16) 同上書15 p1
- 17) 前掲書15
- 18) 岡田和雄, 平林宏美, 藤井喜一 シュート合戦を中心にしたサッカー遊びの授業 体育科教育29(4) 大修館書店(1981) p31-37
- 19) 前掲書14 同所
- 20) 文部科学省 小学校学習指導要領解説体育編 教科の目標及び内容
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387017_10_1.pdf 2017/8/23 掲出 p18-23
- 21) 文部科学省 小学校学習指導要領解説体育編 改定の基本方針
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387017_10_1.pdf 2017/8/23 掲出 p3
- 22) 日野克博 知識・技能 学習指導要領改訂のポイント(小学校・中学校体育保健体育) 明治図書(2017) p18-19
- 23) 前掲書20 p23
- 24) 前傾書22 同所

巻末資料1 学校体育指導要綱、小学校学習指導要領とそれに準じて発行される指導書、解説書に示されるサッカーの個人技能

① 昭和22年発行学校体育指導要綱におけるサッカーの取り扱い

学年齢	取り扱い
(一) 小学校低学年「約7年—9年」	取り扱いなし
(二) 小学校高学年「約10年—12年」	遊技(球技) 対列フットボール(3, 4年) フットボール(5, 6年)
(三) 中学校「約13年—15年」	男子のしゅう球型の球技 サッカー
(四) 高等学校(仮称)「約16年—18年」	男子のしゅう球型の球技 サッカー
(五) 大学(仮称)「約19年—22年」	男子のしゅう球型の球技 サッカー

② 昭和33年改訂小学校学習指導要領におけるサッカーの指導内容(個人技能)

学年	個人技能	中心的な活動
1, 2年	キック, ストッピング	対列ボールけり
3, 4年	キック, 守備的技能	ラインサッカー
5, 6年	キック, ポジションを決めた攻撃や守備	正規のサッカーに近いゲーム

③ 昭和43年改訂小学校学習指導要領におけるサッカーの指導内容(個人技能)

学年	個人技能	中心的な活動
1年	キック, ストッピング	対列ボールけり
2年	キック, ストッピング	ラインサッカー
3年	キック	ラインサッカー
4年	パス, ディフェンス	ラインサッカー
5年	パス, ドリブル, ディフェンス	正規のサッカーに近いゲーム
6年	パス, ドリブル, ディフェンス	正規のサッカーに近いゲーム

④ 昭和52年改訂小学校学習指導要領におけるサッカーの指導内容(個人技能)

学年	個人技能	中心的な活動
1年	「ボール遊び」としての記載のみ	記載なし
2年	個人技能の記載なし	
3年	個人技能の記載なし	ラインサッカー
4年	(簡単な技能を身につける)	
5年	(簡単な集団技能を生かしたゲームができる)	正規のサッカーに近いゲーム
6年	ようにする)	

⑤ 平成元年改訂小学校学習指導要領におけるサッカーの指導内容(個人技能)

学年	個人技能	中心的な活動
1, 2年	記載なし (みんなでゲームが楽しくできるようにする)	ボール遊び
3, 4年	記載なし (簡単な技能を身に付け、ゲームが楽しくできるようにする)	ラインサッカー
5, 6年	次の運動の技能を身に付ける (簡単な作戦を立てたりしてゲームができるようにする)	正規のサッカーに近いゲーム

⑥ 平成3年発行小学校体育指導資料(p43~46)におけるサッカーの指導内容(個人技能)

学年	個人技能	中心的な活動
1, 2年 ゲーム	パス, ドリブル, シュート	ラインサッカー
3, 4年 ゲーム		
5, 6年 ボール運動	パス, ドリブル, シュート	正規のサッカーに近いゲーム

⑦ 平成10年改訂小学校学習指導要領におけるサッカーの指導内容(個人技能)

学年	個人技能	中心的な活動
1, 2年	記載なし (みんなでゲームが楽しくできるようにする)	ボールゲーム
3, 4年	記載なし (簡単な技能を身に付け、ゲームが楽しくできるようにする)	サッカー型ゲーム
5, 6年	(技能を身に付け、簡単な作戦を生かしてゲームができるようにする)	正規のサッカーに近いゲーム

⑧ 平成10年発行小学校学習指導要領解説におけるサッカーの指導内容(個人技能)

学年	個人技能	中心的な活動
1, 2年	キック, ストッピング	蹴り合いや簡単なゲーム的当てゲーム, シュートゲーム ボールを蹴ってのベースボール
3, 4年	パス, ドリブル, シュート, ディフェンス	人数や場を工夫したゲーム
5, 6年	パス, ドリブル, シュート, ディフェンス	人数や場を工夫したゲーム

⑨ 平成20改訂小学校学習指導要領におけるサッカーの指導内容（個人技能）

学年	個人技能	中心的な活動
1, 2年	記載なし (簡単なボール操作やボールを持たないときの動きによって, 的に当てるゲームや攻めと守りのあるゲームをする)	ボールゲーム
3, 4年	記載なし (基本的なボール操作やボールを持たないときの動きによって, 易しいゲームをする)	易しいサッカー型ゲーム
5, 6年	記載なし (技能を身に付け, 簡単な作戦を生かしてゲームができるようにする)	正規のサッカーに近いゲーム

⑩ 平成20発行小学校学習指導要領解説におけるサッカーの指導内容(個人技能)

学年	個人技能	中心的な活動
1, 2年	キック ストッピング ボールが飛んだり転がったりしてくるコースに入る ボール操作できる位置に動く。	ボールを蹴って行う的当てゲーム 的当てゲームの発展したシュートゲーム ボールを蹴って行うベースボール
3, 4年	パス ストッピング ボールをもたないときの動き	ラインサッカー, ミニサッカーなどを基にした易しいゲーム
5, 6年	パス ドリブル ストッピング シュート ディフェンス ボールを持たないときの動き	簡易化されたサッカー

巻末資料 2-1 高等学校学習指導要領解説（保健体育編）におけるサッカーの指導内容（個人技術）

技能	昭和45年	昭和54年	平成元年	平成11年
パス	キック	キック	個人技能に関する内容の記載なし	○
トラップング	○	○		○
ドリブル	○※2	○		○
ヘディング	○	○		○
タックル	○	○		○
シュート	○	○		○
スローイング	○	○		○
フェイント				○
ゴールキーピング	○			○

※2 1対1のボールキープを含む（p99）

巻末資料 2-2 中学校学習指導要領指導書，解説（保健体育編）におけるサッカーの指導内容（個人技術）

技能	昭和45年	昭和53年	平成元年	平成10年
パス	キック	キック	キック	キック
トラップング	○	○※3	○	○
ドリブル	○	○※4	○	○
ヘディング	○		○	○
タックル	○			○
シュート	○	○	○	○
スローイング	○		○	○
フェイント				
ゴールキーピング				○

※3 「ボールを支配下に置く」を含む（p59）

※4 「相手を抜き去る，ボールを運ぶ」を含む（p59）

巻末資料3 キープ技能に関連するボール慣れ, ボールコントロール, ドリブル, ボールの奪い合い, 1対1の攻防などを報告した実践

NO/学年/発行年/巻(号)/ページ/著者名/タイトル/サブタイトル/キープ技能に関連する内容/(キープ技能に関連する内容の指導時間数/単元時間), 準備運動として帯状に実施している場合は, 「帯」と記入

- 1 高校/1954/2(11)/62-66/松浦利夫/高校生のサッカー指導について
/ドリブル練習/(1/12)
- 2 小4/1966/14(12)/48-52/西沢 宏/子どものための教材づくり
/小学校のサッカーについて(その2)/ボールに慣れる
/ドリブルストップ遊びボール遊び, ドリブル遊び/(1/8)
- 3 小3/1977/25(11)/61-66/内村喜久男/一人ひとりが楽しく動ける
ラインサッカーをめざして/ボールの奪い合い/(1/7)
- 4 小1/1981/29(4)/31-37/岡田和雄・平林宏美・藤井喜一/子どものよろこぶ
授業をめざして/低学年のサッカーあそび(その1)/ボールとり/(2/7)
- 5 小2/1981/29(5)/32-37/岡田和雄・平林宏美・藤井喜一/子どものよろこぶ
授業をめざして/低学年のサッカーあそび(その2)/ボールはさみジャンプ・ボール
タッチ・1対1のボールとり/(帯)
- 6 小2/1987/35(7)/75-79/今井康夫・細江文利/低学年のサッカー遊び/1対1の攻
防/(4/11)
- 7 中2/1981/37(1)/53-58/中村政一郎・嘉戸脩/画一的学習活動から多様な学習活動
への試み/サッカーの学習を通して/個人練習(キック&パス, ドリブル&フェイン
ト, トラップ&パス/帯)
- 8 小3/1990/38(5)/70-71/林恒明/たまご割りサッカーの授業づくり
/個人のボールコントロール/(3/7)
- 9 小6/1991/39(5)/42-44/盛島 寛/みんながうまくなるための指導ポイント/サッ
カー/足によるボール操作に慣れる/(帯)
- 10 小6/1994/42(7)/36-38/遠藤 裕/サッカー授業実践例/工夫した課題ゲームを取り
入れた授業/ドリブル中心のゲーム/(10/10)
- 11 小6/2000/48(4)/46-48/岡出美則・小川正一・長妻美孝・佐藤隆治・近藤英基/授業で
使える戦術論/小学校6年生のサッカーの授業におけるサポートの学習可能性/ワン
パウンドリフティング, ボールタッチ/(帯)
- 12 小5・6/2003/51(1)/62-65/盛島 寛/心とからだの体育授業 もっとやさしく, もっ
とかかわりのある体育の授業を求めて/サポートを学習の中心にすえたサッカーの授
業/ドリブルやボールキープ能力を高めるドリルゲーム/(帯)
- 13 中1女/2008/56(13)/70-71/高橋健夫/八城雅彦/女子生徒が熱狂するフットサル/
中学1年生/ドリブルとボールコントロール/(2/10)
- 14 小5/2009/57(11)/16-19/吉永武史/馬場智哉/サポート学習による小学校5年生の
サッカーの授業実践とその成果/ボールタッチ・ボール鬼・2人組ボールタッチ/(帯)
- 15 高2/2014/62(11)/44-47/清本勝政/続サッカーの教材づくり・授業づくり/高校段
階で「サポート」と「状況判断」をどのように学ばせるか/ボール2個を使って4対1
のボールキープ/6(3+3)対3のボールキープ/ボールタッチ/(帯)
- 16 小4/2015/63(6)/52-55/小松元樹/体育的学力と全員参加を保证する体育学習全員
シュートを目指す「フリーシュートサッカーゲーム」/ドリブルランニング, ボール
コントロール/(帯)
- 17 小6/2017/65(2)/48-51/続木智彦/林憲司/男女の能力差にどう向き合うか/子ども
たちとともに創るサッカー学習を通して/ドリブルコート回り/(帯)

Necessity of Teaching on Ball Keeping Skills in Elementary School Soccer Lessons

Toshihiko MOTOZUKA

Abstract :

In this research, the teaching on keeping skills, which is one of ball handling skills, in soccer lessons is not being conducted as compared with teaching shoots and pass which are the same ball handling skills, so the necessity of teaching on keeping skills was examined.

As a result, the necessity of teaching on keeping skills below was suggested.

- 1 In order to solve the problem in game learning of soccer lessons, it is necessary to acquire keeping skills, suggesting that skill teaching is necessary.
- 2 The keeping skills are more difficult skill than other skills of soccer because of the difficulty of the ball handling method which makes it impossible to grasp the ball, suggesting the necessity of teaching on keeping skills.
- 3 In order to experience the essential pleasures of soccer, it is necessary to teach keeping skills as it is necessary to acquire keeping skills.
- 4 In order to acquire “Knowledge” and “Expressing Abilities” in soccer lessons, it is necessary to teach keeping skills as it is necessary to acquire keeping skills.

Keywords : Soccer, Ball Handling, Keeping Skill, Tactics Selection